

気持ち伝わるコミュニケーション 言葉に限界、五感いかして

新型コロナウイルスによる感染者の急増で、再び各地で緊急事態宣言が発令され、3密を避ける制約が強化されている。対面のコミュニケーションが禁じられて、人と会えない不満がたまりつつある。一方、テレワークやオンラインの会議が普及して、メールやSNSの情報通信技術を用いれば、かえってコミュニケーションがとりやすくなっているという意見もある。ただ、フェイクニュースやヘイトスピーチ、風評被害など、言葉でだまされ傷つくが増えると、言葉で世界を作ってきたはずの人間が、逆に言葉に支配されて苦しんでいるような気がしてくる。

いったいコミュニケーションとは何だろうか。私たちは何を伝え合っているのだろう。

長年、野生のゴリラと付き合っていたことは、心を読むのに言葉は要らないということだ。ゴリラは人間より体が大きく、強大な力を持っている。長く鋭い犬歯でかまれれば命を失う危険がある。実際、私は2頭のメスに襲われ大けがをした。だから、気持ちを読み違えれば大変なことになると自覚している。

でも仲良くなれば、ゴリラは心の許せる友人となる。声を出してあいさつすれば応えてくれるし、目を見ればいたずら心を起こしているとわかる。慣れれば、後ろ姿を見ただけで気持ちが伝わってくる。言葉が介在しなくても、ゴリラと気持ちを伝え合うことは可能なのだ。人類の祖先も、言葉が話すまでは、おそらく声やしぐさを組み合わせた態度で気持ちを伝え合っていたはずだ。

実は今でも気持ちを伝えるのに、意味のある言葉は要らない。「おはよう」「元気？」などと中身の言葉は交わすだけで十分だ。声の抑揚や表情、態度で相手の気分や状態がわかるし、自分をどう感じているか伝わってくる。必要なのは言葉の持つ意味ではなく、声や身体の動きで作られる全体的な感触なのだ。

では、言葉はいったい何のために作られたのか。人間を含むサルや類人猿といった霊長類は、視覚優位の世界認識を持っている。視覚は五感のうちでまず物事を理解するのに用いられ、他者とたやすく共有できるからだ。次に聴覚、嗅覚、味覚、触覚の順に共有度が下がる。変な音が聞こえたり匂いがしたりすると、見て確かめたくなるのはその表れだ。それは霊長類の祖先が樹上で暮らし、夜から昼の世界に進出した時に、鳥と同じような立体視と色彩を感知する能力を身につけたことによる。言葉は五感を音によって表現する手段で、まずは視覚に対応するようになっている。形や色の表現が多彩なものも視覚に基づくからだ。

しかし、面白いことに信頼を高める五感とは逆で、触覚や味覚、嗅覚といった他者と共有しにくい感覚が重要になる。それは他者と直接接触し合い、近接して身体を共鳴させたときに味わう感覚で、身体がつながったような気持ちになるからだろうと思う。逆説的に言えば、他者と共有しにくいからこそ、相手の気持ちを感じようという心の動きが生まれるのではないだろうか。

言葉もその感覚を伝える。ざらざら、すべすべ、べったり、あまつたるとい、つんとくる、などの表現も多彩だ。しかし、これらの言葉は実際に体験してみないと腑に落ちないことが多いし、「卵の腐ったような臭い」などと実際の現象を例にとることも多くなる。それは、他者も同じように感じているかどうかを確かめることが難しいからである。でも、親密な人間関係を保つためには、視覚や聴覚以上にこれら三つの感覚を共有することが重要になる。共に暮らす上で、身体と心を共鳴させることが不可欠になるからだ。

気持ちを伝えるためには、何百という優しい言葉を投げかけるより、じっと抱き合ったり、手をつなぎ合ったりする方がいい。コロナ禍で制約されている身体の触れ合いを情報技術に明け渡してはいけない。いのちをつなぐためには言葉の限界を理解し、もっと五感を生かすコミュニケーションを駆使すべきだと思う。